

京のきもの文化

溝端 千晴

(2020 年度入学 4 期生)

私がこれまでに着物を着たのは、七五三の時の 3 歳、7 歳、そして今年の 1 月に行われた成人式の振袖の 3 回である。私が着た振袖は祖母が叔母の成人式の時に購入した物で、総絞りと呼ばれる染め方の品物だった。総絞りは色も 4 色ほどしか使われておらず、デザインもシンプルだったため、最初、私は総絞りの良さがわからなかった。しかし着物について調べるうちに、着物には多くの種類があること、総絞りは今では貴重な物であることなどを知り、着物の奥深さを知った。そこで、多く種類のある着物の中でも京都で織られている着物について述べていきたい。

京都と着物文化の歴史

そもそも着物の発祥は縄文時代、布を体に巻き付けて紐で縛る「巻布衣（かんぷい）」や、布の真ん中に穴を開けて頭を出す「貫頭衣」から始まったとされている。

飛鳥時代ごろになると大陸の影響を生けた衣装が着られるようになったが、日本の気候風土に合っていなかったため形状が少しずつ変化していった。すると、着物への価値観も変わり、平安時代になると貴族の女性が十二単を身につけるようになった。時代とともに変化してきた着物文化であるが、京都の着物文化のルーツは平安時代にあるといっても過言ではないだろう。

～平安時代～

先ほど述べたように、京都における独自の着物文化は京が都となった、平安期に遡る。この頃の貴族の女性が身につけるようになった十二単は、大きく開いた袖と幅が広い前合わせの「単（ひとえ）」や「五衣」、「打衣」などを重ねて身につけるものである。これらは大陸文化の影響が強かったそれまでの衣装とは大きく異なり、独自性に富んだ日本の民族衣装として成立した。身に付け方や形状の違いはあるものの、現在も続く着物の原型となっている。

また、朝廷では絹織物の職人に、染物を司った織部司という役職を与え、色彩豊かな高級織物を生産する仕組みが生まれた。

～鎌倉時代～

平安時代が終わり武家社会になると、重くて動きづらい十二単は衰退し、袷が普及し始めた。その下着には袖が短く動きやすい色鮮やかな「小袖」が人気を博した。また、武家社会になったことで役職を持った職人たちが多く解雇されてしまった。その解雇されてしまった職人たちは大舎人町に集まり、大陸の新しい技術を取り入れた質の良い織物を生産し続けた。

～室町時代～

室町時代に入ると「大舎人座」という組織組合を立ち上げ、朝廷や公家、武家から織物を受注し、生産していた。しかし、室町中期に京都を東軍、西軍に二分した応仁の乱が勃発。その戦火を逃れるために離散した職人たちは、戦が収束するとともに、西軍の本陣であった場所で織物業を再開した。

そして大陸から伝わった高織（たかはた）という技術を取り入れ、染色した糸で色柄や文様を織り上げる紋織が誕生した。

この西軍の地は「西陣」と呼ばれ、織物の一大生産地となり、その紋織が「西陣織」として朝廷にも認められるようになった。

～江戸時代～

江戸時代に入ると、糸問屋や織屋を生業とする織屋街が形成され、小袖の発展や、小物や紐で装飾するようになり、西陣の地は繁忙を極めたとされる。そして呉服の調達や作法を教えていた呉服所が呉服商へと発展し、三越越後屋といった巨大呉服店が誕生する。これらの呉服店が京都に本拠地を置き、大坂や江戸に営業を展開した。それが街道の整備と経済の発展により京都が持つ織物の技術と文化が全国へと広まるきっかけとなった。

京都発祥の代表的な着物

京都には独自の織物が数多く展開されている。それらは現代の京都においても伝統産業として根付いており、重要無形文化財となっているものもある。長い歴史の中で生まれた着物は次の5種類が挙げられる。

○西陣織

西陣織は、多くの色の糸を使用した絢爛豪華な色柄が特徴とされている。金糸などを使った華やかな綴（つづれ）や緞子（どんす）、素朴な風合いが魅力の絣織（かすりおり）など、多彩な技術で作られる先染織物の総称である。これらの技術は12もの種類がありそれぞれ色や柄が違っている。

織った後に染める「後染め」よりも繊細な図柄や独特な艶が魅力で、金糸や銀糸をふんだんに使った西陣織の帯は身につける芸術品とも言われている。



○京鹿の小紋

「鹿の子紋」は生地を糸でくくって染める「絞り染め」の一種で、出来上がる模様が鹿の背中模様に見えることからこの名前がつけられた。鹿の子紋の中でも京都で作られる絹の鹿の子紋は京鹿の子紋と呼ばれ、非常に手間がかかることから高級品として扱われている。



○京友禅

友禅とは真っ白な絹織物に絵を描く染め技法で、京友禅・加賀友禅・東京友禅を合わせて「三大友禅」と呼ばれている。

京友禅は17世紀後半、京都知恩院門前で暮らしていた扇絵師、宮崎友禅斎が小袖の染め模様を染めたことが始まりである。

上品で柔らかい色合いや奥ゆかしい古典柄が多く使われる京友禅は、全ての友禅の元祖と言われている。



○京小紋

京都ではおよそ1200年前からの染め方を使用した京小紋が作られている。

小紋とは、もともと武士の袴（かみしも）にある小さな文様を単色で型染めしたものである。江戸時代には小紋を染めた麻の袴が武士の正装となった。そして庶民の間にも町人文化の自由でおしゃれな感覚が受け入れられるようになり、粋な流行りとして小紋が広がった。元は単色だった小紋も多彩な色使いへと変化していった。絵画的な絵柄が多色で染められているところに品の良さを感じる事ができる。



○京黒紋付染

結婚式などの留袖、葬儀の喪服など黒一色に染める伝統技法である。気品と深みのある黒が特徴であり、黒引染と黒浸染という技法が用いられている。



〈最後に〉

鎌倉時代以降の京都における着物文化は、どの時代の着物文化にも京都は関係しており、それは400年続いた平安時代に京が都であったからであることが大きい。これまで述べてきた様々な着物文化は京都で生まれ、全国に影響を与えてきた。現代でも日本における着物文化が残っているのは、伝統産業として着物を守り続ける京都の存在があるからである。

(参考文献)

梨花和服 “京都着物の成り立ちと歴史とは？” . <https://ewha-yifu.com/blog/kyoto-info/5958/> (参照 2022-6-30)

着物レンタル VASARA HOME ”京都着物の歴史と成り立ちについて” . <https://vasara-h.co.jp/tips/detail.html?id=70>

(参照 2022-6-30)

京都の伝統産業”京鹿の子絞り” . <https://densan.kyoto/industry/kyo-kanoko-shibori/> (参照 2022-6-30)

西陣織工業組合”西陣織とは” . <https://nishijin.or.jp/whats-nishijin/> (参照 2022-6-30)

きものと”ものづくりの現場” <https://www.kimonoichiba.com/media/column/110/> (参照 2022-6-30)

KOGEI JAPAN”京小紋” . https://kogeijapan.com/locale/ja_JP/kyokomon/ (参照 2022-8-8)